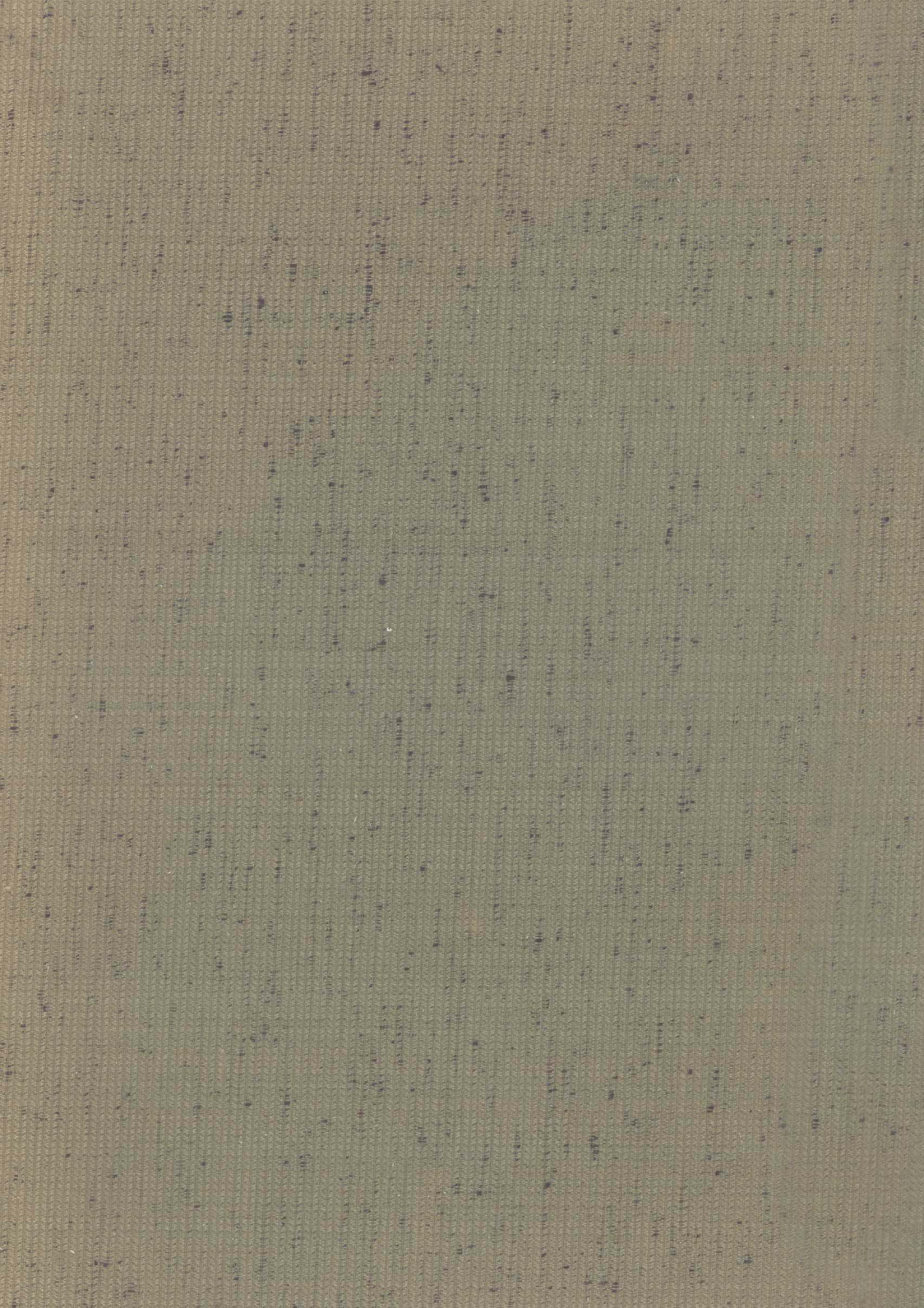




春燈合同句集

春燈集
第三集

春燈社

春燈集 第三集

定価 三、八〇〇円

昭和五十五年八月一日発行

発行者 安住 敦

発行所 春燈社

東京都目黒区柿ノ木坂三十四―一四

郵便番号 一五二

電話 (〇三) 四一四―九六八〇

印刷所 新光印刷工業株式会社

はじめに

この合同句集に収録した作品は、昭和五十四年十一月現在の「春燈」の作者で、昭和五十一年一月号から昭和五十四年十一月号までの「春燈の句」「特別作品」「当月集」「燈下集」のものです。

ほかに春燈にゆかりのある方を数人加えました。

この合同句集に収録した作品は、右の作品から作者がそれぞれ十五句を自選したものです。収録作品は「春燈」に発表された作品どおりを原則にしました。物語作者の作品は、それぞれ故人とゆかりのある作者に選出を依頼し、一部は編集委員が選出しました。

この合同句集では、作品を四季別、季節別に配列し、各季の配列は春・夏・秋・冬・新年の順にしました。

配列は作者の姓号のアイウエオ順にしました。

小中学生の作品は特に現代仮名づかいを採用しました。

作家名簿は作品集の末尾に別表として掲載しました。

春燈集編集委員会

春

植 物 …… (68)	動 物 …… (54)	宗 教 …… (50)	人 事 …… (31)	地 理 …… (27)	天 文 …… (18)	時 候 …… (2)
----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------

目
次

夏

植 物 …… (176)	動 物 …… (160)	宗 教 …… (155)	人 事 …… (127)	地 理 …… (124)	天 文 …… (114)	時 候 …… (104)
-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

秋

植 物 …… (271)	動 物 …… (257)	宗 教 …… (252)	人 事 …… (238)	地 理 …… (235)	天 文 …… (222)	時 候 …… (212)
-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

.....安住敦.....(436)

冬

新年

(436)

春

春
浅
し
空
ま
た
月
を
そ
だ
て
そ
め

万
太
郎

時 候

春(はる)三春 九春

雨の中春はしづかにととのへり
 新作の春家具どれも色白で
 春幾とせネクタイしむること忘れ
 石投げて火口湖に春目覚めさす
 異国めく馬具屋の前や春の午後
 花舗ありて輔道に春をあふれしむ
 小康や夢買ふ春の宝くじ
 まとひつくラップフィルムや春厨
 オンザロックの春の氷と思ひけり
 兵燹をうけざる春の城美し
 節くれの指をいとしみ春迎ふ
 新任校春爛漫の丘の上に
 春くれば母のかたみのショールせむ
 どの人も老いしことのみ春の坂
 京の春お茶々と呼べる銘菓あり
 おもほゆる韃靼の春砂の国

安立 公彦
 相田梨花女
 青木 正亭
 青戸 参郎
 池部紀久女
 市橋 慶彦
 岩岡 里子
 内山 美江
 梅尾まさこ
 江原 清
 大木 秋子
 岡村 萩樹
 岡山よし江
 門 紫乃
 菊地恵美子
 菊地 瑩子

春確かりキュール菓子舌に溶かし
 春の電車女動けば女の香
 住き人を迎ふる春の景色かな
 胡麻を搦り青菜を茹でて春厨
 愛憎の涙母娘の春遠し
 春餌場まづ偵察の雀が来
 春まだき阿修羅の眉に憂ひ見し
 老僧の悲願大仏春開眼
 スプリングハズカム風邪の流行りけり
 どう見ても春の疊に母は亡し
 春といふ気やすさに風呂ぬるうせり
 納戸まで春に背ける段梯子
 拓本の貴人は馬で村は春
 出不精と言はさず春のネクタイで
 春は待つものふくらみ初めし猫柳
 いらつしやいと鸚鵡に言はせ春の花屋
 門のことりと春の音なりけり
 金釘流に記せど春はあらはなり
 昼暗き春の滝見て濡れてけり

黒田美恵子
 児嶋 吾平
 近藤みどり
 佐々木たけ乃
 佐々木はま女
 斉藤 宏子
 下川 白湘
 瀬藤喜陽寅
 田中幸兵衛
 高嶋 文清
 武井 破位
 辻村 子鳳
 土谷 左吉
 土谷 左吉
 長島 あき
 成毛 克子
 橋田 沙羅
 橋本春穂子
 藤原 広志

春にまたあひしよろこび大切に
春かへる暖を吐きて鯉巨き
汐鳴りや春の砂丘の砂の色
夫を娘に頼みて春の旅にあり
棕栢焚いてあえかな春を燃えたたす
柳瀬 芳
山下 青芝

二月（にぐわつ）

墓原ややさしきものに二月の日
刈株の筋目正しき二月かな
二月月の苺は白き皿に盛る
癌のドラマやたら目につく二月かな
戻りきて二月の風を罵れる
婦人服バーゲンセール二月かな
葉牡丹の渦のゆるみし二月かな
二月の風に真向ふ貌をあげにけり
温ぬくと素通りしたる二月かな
二月月の仁恵の雨いたりけり
枝触れて櫂ささやく二月かな
二月月や海より明けて紀伊の国
七草の籠も二月となりにけり
古久保富美子
古住 蛇骨
百瀬 幾代
岩崎せい子
岡村 萩樹
加藤 英乃
久野 笑子
小島ふじの
小星よし子
斎藤 乃年
新保 旦子
関口きく江
土居あや子
富崎 梨郷

雨音が高し二月第五日曜日
裸木が雨呼んでゐる二月かな
天心に鶯の高啼く二月かな
ゆりかもめふやし二月の放水路
白鳥の目と合ふ山の湖二月
夢に見る母はすぐ消え二月尽
林檎欲る二月の海の蒼さ見て
あら炊の鯛の煮こごる二月かな
餅網の真ン中黒き二月かな
敏森 功一
内藤 道川
長坂 正昭
羽鳥 千恵
林のぼる
道前 幸子
山田三四郎
山本みえ子
吉城 鎮雄

睦月（むつき）太郎月

睦月はや一ト日残すも客疲れ
C五七のつひの写真か睦月尽
生えそめし歯に力あり太郎月
宇賀神広子
江美マサオ
黒崎かずこ

旧正月（きうしやうぐわつ）

下駄買ひてふと旧正と思ひけり
旧正やいたくちびたる利休下駄
君子 蘭 旧正月の 庇むろ
ぼっねんと農家一軒旧正す
植木 正人
栗田 素江
多田 東浦
山口 誠雨

寒明（かんあけ）寒明く 寒の明け

点滴に命預けて 寒明くる

秋山 紫秋

寒明の谿に無音の私語湧けり

宇都 節

遠州や砂しめらせて寒明くる

倉橋 澄子

苦髪染爪紛れなく寒明けにけり

斎藤 四郎

寒明や雑用はどつと重なるもの

斎藤 乃年

寒明の伊勢海老生きて届きけり

高橋 清水

寒明やなかなか減らぬ山葵漬

名見崎 新

藪型に雪溶け残り寒明くる

長島 あぎ

遂に寒明くるまで晴れぬきにけり

藤本 荒屋

わび助の散りて大寒明けにけり

三島すみ子

寒明や人の出入の杉林

嶺 治雄

寒明けし空磨くごとガラス拭く

森田稻毛子

立春（りつしゅん）春立つ 春来る

鳥翔けて木より樹へ告ぐ春立つと

安藤 利恵

立春のぶつかり合ひて水急ぐ

会田 保

春立つや世紀後れのオルゴール

青木 木芳

足れば仙境盆地拳石春立てり

荒川 可村

視力落つるも初老の兆し春立ちぬ

大木 秋子

立春や歳月いつも大股に

大平 土羊

立春を過ぎての雪もきのふ今日

大森 光代

春立つやきらめきまさる風の空

岡本 山止

春立つや一生ものの印を購ひ

蒲生 利成

男滝にはをのこのひびき春立てり

上山 永晃

春立つや遠まなざしの檻の鳥

木嶋 梅子

視野うづめゆく雪片や春立つ日

木村ちよこ

立春の卵みな立て 冷蔵庫

桑原 古城

春立つ日眩しく母と頷ちけり

小林 寿子

白菜の株割れて春立ちにけり

小林 史女

立春の満月のぼる空ありぬ

佐間田 愛

春立つや停年のなき店を守り

椎名まさを

大皿の赤絵より春立ちにけり

下川 白湘

春立つや砥石へ引きし油の香

杉山芳之助

立春の水音に刻うつりけり

高嶋 文清

立春の夜の静けさのしまひ風呂

辰野 一郎

薬師如来に一燈を献じ春立つや

辻 まこと

立春の昼湯に浸る小さな幸

富野 貞男

春立つや近き木々より遠き樹々

長倉 閑山

早春（さうしゆん）春さき

柔かく拭ふ鏡や春立つ日	根岸喜美江
立春雨しばらくありて牡丹雪	久永雁水莊
引地川水藻ゆたかに春立ちぬ	藤本 荒星
立春大吉啐啄の卵罅走り	二村 蓼紅
豪雪の底より春の立ちしかな	本多 正彬
春立つや気丈と見せて母逝きぬ	正井 栗子
春立つや量感もどる山の音	松尾 藩子
春立つや花舗に立寄る試歩の道	箕岡 夕子
立春大吉の駒形どぜう煮立ちけり	依田 夢丘
早春や落葉と語る山の路	安立 公彦
早春やサーフィン族を誇らしめ	入沢 正
早春や寺に詣でて会ひし雨	加藤 保子
網をすく早春の浜車座に	河原 星風
早春や孔雀は枝に尾は見せず	越 寿美
早春や童画のやうな雲が浮き	関本 英久
早春の日をたのしむや鵜島の鵜	高橋 緑川
早春や語学開講案内来	福田柳太郎
早春や波の秀乱すかくれ礁	吉本さつき

春浅し（はるあさし）浅春 浅き春

春浅く風が変れば海も凧ぎ	相原 曉美
浅春や菜の花色に玉子焼く	朝岡みのり
枝ごとに雫光りて春浅し	陰山福久子
春浅く水は流れを早めけり	桂 なほ
春浅し海辺の屋根の枯松葉	近藤 乙夜
父情ときに行きすぎて春浅きかな	高橋 京子
春浅し耳までかくすショールして	永瀬 晴水
撥おいて三味線おいて春浅し	成毛 克子
店々の冬物バーゲン春浅し	長谷 仁子
浅春の水槽の鯛に睨まれし	平坂まさる
浅春やセピア色した風が過ぐ	広沢喜美子
売れ残る雪花菜の玉や春浅し	藤井 秀湖
春浅し子を待つ夕餉鍋ものに	水上多美子
春浅し娘の焼くチーズケーキ匂ふ	宮川 玉英
冴返る（さえかへる）冴返る 寒もどろしみ返る	
冴返る山並みのよく見ゆるなり	浅原 ケイ
水差しに昨夜の水あり冴返る	磯辺木綿子
戻り寒癒えたる筈の胸痛み	梅沢 清治

冴かへる織田作好みなるマダム 鳳ヨシタカ

冴かへる舞台の雪の敷かれけり 木村 はる

冴返り 冴返りつつ 仏殖ゆ 北浦 馨

冴返る織子の声のかん高く 北川 岩男

冴返る子を叱る声つつぬけに 猿田 寿子

毛の国よりこんにやく提げ来寒もどり 橋 正義

胃の腑より冷え突き上げて寒戻る 中川原澄子

冴かへる諏訪湖の上の二日月 永由 君人

日めくりのはがしわすれや冴返る 成毛 克子

冴返り 冴返りたる五重の塔 西野 勇甫

冴返る鞍馬の里に葬のあり 藤木 祥治

冴返る父の遺影の若かりし 松島 朱葉

冴返る日のことさらに汐匂ふ 松村 千丘

寒戻る喪に行く帯をきつく締め 山口 ひさ

余寒（よかん）残る寒さ

堆く葱つみあげし余寒かな 相田梨花女

塩焼の鱒の焦げ目の余寒かな 石井貫木子

疑心ふとおこる一事の余寒かな 浦岡 瑠璃

分ち合ふ愛すくなくて余寒かな 佐橋 敏子

詣でける鎌倉宮の春寒し 谷藤 みね

天窓の空の四角の余寒かな 林 明子

涅槃図を咫尺に余寒の膝ただす 原 しま女

病みし身に閉ざす座敷の余寒かな 牧野 春

新比丘尼髪おろす座の余寒かな 宮川 玉瑛

小鉢の掌にしみ透る余寒かな 宮川 玉瑛

民族音楽聞くメキシコの余寒かな 宮村 紫龍

耳奥に母の声栖む余寒かな 諸戸せつ子

子任せの納税申告書余寒 山本 富女

いか割けば墨かけらるる余寒かな 吉沢恵美子

生簀まで櫓音の軌む余寒かな 吉本さつき

春寒し（はるさむし）春寒 料峭

春寒の鴈料峭の鶺鴒の鳥よ 安住 敦

人に齡訊かれし春の寒さかな 新井賢一郎

春寒や尼の剃刀包む紅絹 井坂多米子

たのまれし猫の供養や春寒し 河原 星風

子に問へぬ一事のありて春寒し 工藤まどか

飯橋のきしみて春の寒さかな 桑原 松代

母の無理通して春の寒さかな 小星よし子

春めく(はるめく)春動く 春さざす

春寒や言葉つくろひつつ悼む	佐藤 花子
春寒き楽屋鏡やよごれ役	坂井寿美江
酒値上げ煙草も値上げ春寒し	高橋日南子
料峭や千人塚といへる丘	高橋 緑川
廃墟とは闘技場のことか春寒し	高山 美幸
春寒し知命の眼鏡曇りがち	辻 善造
春寒し八專降りの豚市場	橋本 定
春寒やものを四角におく机	久永 淳子
料峭や言葉の過ぎし故の黙	深江てる子
料峭や竹に風ぐせつきしまま	藤代 寿峯
明日の日のわからぬ春の寒さかな	藤本 青湖
春寒や筆硯汚れしまま幾日	堀内 五齡
春寒や鏡の顔の他人めき	宮川 玉英
春寒の硯に水を注ぎけり	村松 千子
春寒の包帯白く独りをり	村松 千子

春めくや俳人ローカル線好み 木村 喜江
春めくや母の忌近し母恋し 栗田はつ子
春めくや児に一年の過去できて 桑田千恵子

雑木林のむかうの空の春めけり 小林 寿子
春めくや耳搔爪切ひとつところ 嵯峨山輝美
春めくや長びく妻の立ちばなし 谷口登良夫
水仕事多き休日春めけり 中野 マサ
春めくと外出の用を買つて出る 長谷川よし子
春めくやベビーベッドの向きかへて 藤江むつ代
春めける団地馴染みの研屋をり 山内悠久子
春遅し(はるおそし)春遅々
着なじみしもの今日も着て春遅し 山中 重治

魚氷に登る(うをひにのぼる)

壬申の鮒氷に上る大津かな 上西 兵八
雨水(うすゐ)

潮満ちて堂島かすむ雨水かな 寺川 櫛山
犬吠の雨水の雪となりにけり 若林 一童
鰯魚を祭る(かはうそををまつる)鰯の祭 鰯祭

鰯祭欠けし茶碗をすてにけり 吉村 京子
二月尽(にぐわつじん)

二月尽よろめき落つる疎林の日 明石 晃一
月は暈被て雪降らす二月尽 小田島春子

ひとり居の母に嘆かれ二月尽 島根 良子
 揚げはんべんの温み優し二月尽 杉山 誠市
 甘藍の値崩れかこつ二月尽 西村 勝美
 買ひ溜めしもの読み残し二月尽 平田良一郎
 せせらぎの迅き音立つ二月尽 三宅つよし
 マニキュアで押す曇疵二月尽 安川みつ恵

仲春(ちゆうしゆん)春なかば

玄関にブーッくづはれ春なかば 米内 とく

三月(さんぐわつ)

飛行機に積荷のひよこ三月や 岡山よし江
 三月の休戚の波すくひけり 新保 旦子
 三月の風があられをこぼしけり 田中万砂也
 如月(きさらぎ)梅見月 初花月 雪解月 着更着

きさらぎや子の墓訪ふに妻を連れ 秋間樵二郎
 如月や昏れぎはに来る簞売り 栗屋 由紀
 きさらぎの風の音聞く獣たち 金沢 加寿
 きさらぎや浅蜷あげたる舟着場 小林旭草子
 如月や夜を彩る紅生姜 桜井 白扇
 如月や表札だけの娘と住みて 関口きく江

啓蟄(けいちつ)

如月の気負ふものなき身のほとり 畑瀬 雪枝
 きさらぎや檜にまじるあすならう 林田 栄古
 如月や雨あがりたる日のひかり 原田 小芝
 きさらぎの風の泪をふきにけり 藤井シズエ
 如月やまだいとけなき庭すみれ 堀江 静女
 きさらぎやいちにち聴く猫の耳 嶺 治雄
 如月や水没近き村一つ 和田 妥子

啓蟄に国語の答案帰るなり 荒川 和子
 啓蟄やまづ見参はだんご虫 井上 鐘洞
 啓蟄や地下より出でし千代田線 伊藤 みち
 啓蟄の速乾ペンキ買ひにけり 池谷 守
 啓蟄の雀のよぐれ目立ちけり 糸洲 喜美
 啓蟄や文鳥の足ぬくとして 太田 正
 啓蟄や長距離電話なにとなく 笠谷たかし
 啓蟄や帽子あみだに石仏 金井しげる
 啓蟄や蟻が野道を小走りに 小西嵯峨子
 啓蟄やほつほつ無口ぐせ解けて 嵯峨山輝美
 啓蟄や絶えしとおもふ馬車がゆき 椎名まさを

啓蟄や眼科予約をしなれば	白川 道子
啓蟄や日の当りゐる切通し	鈴木 直光
啓蟄や坐して暮すは本意ならず	高橋 芳葉
啓蟄の土ふくらめり何となく	辻村 子鳳
啓蟄や袱紗バッグの中より飴	土居あや子
南無浄土啓蟄の亀うらがへり	名見崎 新
啓蟄や閑伽桶にある菱の紋	長坂 正昭
啓蟄ややたらと本の拾ひ読み	西野百合子
啓蟄の虫の顔見しことはなし	布上 慧実
啓蟄や高層ビルの灯りそめ	乃木 常人
啓蟄や真砂女を真似て子芋煮て	波羅 綾子
牛百態 啓蟄の地に風生れて	橋本 定
啓蟄の階段滑りし一事あり	日野 幸子
啓蟄の虫より遅き足はこぶ	久永 雁水荘
啓蟄や女はせめて街を往かむ	久永 淳子
六法で出て啓蟄の墓なりけり	平山 鈴女
啓蟄や上下左右は隣家にて	福沢 隆行
啓蟄や広介童話集買ひ帰る	福田柳太郎
啓蟄や遮断機しかと跳ね上り	藤木 祥治

啓蟄や無沙汰をわびて子の家に	古久保富美子
啓蟄や杖をやすめる遊園地	牧 フミ子
啓蟄や息子のやうな師について	宮脇 貞子
啓蟄や地下鉄を出る人の群	師岡 杜鳴
啓蟄の亀はや石に登りけり	山下 ふじ
啓蟄や三十路の誓ひ妻に言へず	山本 隆
自転車に油をくれて啓蟄なり	山本 百秋
啓蟄の丹那とんねるながきかな	吉村 京子
春分(しゅんぶん) 中日 春分の日	
春分の雨の墓参となりにけり	藤原 広志
彼岸(ひがし) 中日 入り彼岸 彼岸寺 彼岸ばらい	
坂のぼり坂くだり彼岸詣でかな	浅田さくよ
枝かよふ風まだ粗き彼岸前	佐藤 光夫
花提げて母の遅るる彼岸かな	斉藤 正義
春彼岸行水為雨亡者不帰	永田 君人
灘の酒供えて父の彼岸かな	西倉ツル子
竹幹の茜さしたる入彼岸	西山 里在
すがる根のがんじがらみや彼岸寺	長谷川 建
辛口に味噌買ひ替へし彼岸かな	古川 幸子

お中日墓域一斉はなやぎて
堀 自適
亡き父の夢に覚めたる彼岸かな
持田 勝枝
刻おかず鐘の鳴るなり彼岸寺
蓮田富五郎
社日（しやにち）春社 七社詣り

たわたわと社日の畦へ大鴉
高野 典子
四月（しぐわつ）

品書きに四月の魚ふやしけり
家室 翠雨
影と登るチェアーリフトの四月かな
村上 桃里

弥生（やよひ）花見月 桜月 夢見月

しやりしやりと踏んでやよひの霜柱
平井 節子
野も山も花も即ち弥生かな
山本泰山子

清明（せいめい）清明節

赤松に清明の風やさしかり
上山 永晃
清明の海鏡より明けそむる
高木 禮子

春曉（しゅんげう）春の暁 春の曙

春曉の霜踏み鹿の通りけり
相原 敦子
春曉の音それぞれの響きもて
東 玲子
春曉のいのち確かに目覚めけり
池田 不妨
春曉や葦の陰占むたなご釣
石川 美子

春曉や夢にまざまざ母の立ち
今井 貞子
春曉のひとりの刻を句の時に
岩崎せい子
春は曙雀の一家めざめをり
加藤 英乃
春曉や一と日始まる小さな音
金子ゆき子

故郷なり春あけぼのの富士ありて
川越 民子
春曉や宿の厨の灯のほのか
河井 久雄

春曉やテレビ体操軽やかに
久保田みき子
はるあけぼのほとけのむなちまだぬくし
角野 寿子

春曉の鐘と聴きしも後しらず
園 梨花

春曉の雨音かろき目覚めかな
知久美知代

春曉の風むらさきに雑木山
波羅 綾子

春曉の天守銃眼より明くる
花岡秋箋子

春 曉 や 紫 か か る 甲 山
村上 光葉

春あけぼの東京が好きわが家が好き
山本 弥生

春昼（しゅんちう）春の昼

宝捜しに似て春昼の眼鏡さがし
安倍 寿美
犬の眸のやさしさと合ひ春の昼
阿部 洋子
茶房に居て春昼しばし刻を措く
新井賢一郎
牛小屋に鶏あそび春の昼
井上ひで女

春の夕 (はるのゆふべ)	春宵	宵の春
春昼や人使ふ身の疲れるて	榎 似郎	
春昼やふるさと土産の菓子甘し	小野保志子	
春昼や白き産着の乳のしみ	加藤 千春	
春昼や牛車乗り入る珊瑚礁	島 公靖	
春昼やあひるの夫婦芝の上	鈴木ふさの	
老の身を託す春昼の車椅子	辻 まこと	
春昼の校内放送よくきこゆ	出口 紀子	
春昼のあがり框の拭きびかり	富山 俊雄	
ふつふつとシチュー煮えをり春の昼	成田なゝ女	
春昼の夢に見知らぬ人ばかり	野村 育男	
春昼やアップルパイの上手く焼け	星野 昭一	
春昼やすはりなほして眠る猫	松橋 利雄	
おにぎり屋に行列入来て春の昼	道前 幸子	
春昼やボンボン一つ口に入れ	山中満寿代	
春昼や小さき画廊の客となり	吉田 勝江	
電車待つ歩廊や春の午さがり	吉田 勝江	
歩行者天国の春の宵なりけり	市川 秋一	
春夕べ泣きたきことのどれを泣かむ	上田晩春郎	

春の暮 (はるのくれ)	春宵	や	アルルの町の鰯	値上げ札風呂やにかかり春の宵	菓子つくる妻に春宵ありにけり
灰皿も形見の一つ春の暮	大西 常一				
身ひとつの軽さが怖し春の暮	黒崎かずこ				
弟の紙飛行機の春のくれ	出口 美穂				
嫁がせて部屋空きし春も暮るかな	山本 三郷				
春の夜 (はるのよる)	夜半の春				
春の夜やつかず離れぬ子の在りて	中山 幸子				
春宵や野性に還る手乗り栗鼠	太田 秀作				
生き形見分け与へられ春の宵	川崎ユリ子				
春の宵別れの言葉やわらかく	佐橋 敏子				
春夕べ雲より白き鷺飛べり	鈴木かおる				
月琴の妬心のうたや春の宵	高平 春虹				
魁夷展出づれば雨の春夕	伴 馬加人				
春ゆふべつうが与ひようを呼ばりけり	本田 保				
春宵や老尼が居間の姫鏡	宮川 玉瑛				
春宵やアルルの町の鰯	吉田 勝江				
値上げ札風呂やにかかり春の宵	和田喜美恵				
菓子つくる妻に春宵ありにけり	若林 一童				